
【体験版】愛されなくても誇りは折れない

— STORY —

かつて指導した年下の後輩が、騎士団長の権力で自分を縛りに来た。
学院研究生カインは最後まで跪かず、笑って耐え、それ故に壊れない。
屈服しない受けの矜持と、独占したい攻めの執着。
折れぬ誇りだけが残る、報われない共犯関係の物語。

【 目 次 】

第一話 扉の向こうの後輩

第二話 魔導筒と初めての夜

1

第一話 扉の向こうの後輩

羊皮紙の角を揃え、インクのにじみを目で確認した。乾いている。論文は昨夜のうちに仕上げてあった。

カイネは卓の端に伏せておいた封書を、もう一度開いた。三枚目の末尾を読み直す。妹の字だった。来月の実習が決まった、と今日の分はそれだけが書いてあった。末尾の「姉上、ご無理なさらぬよう」の一行には、朱のインクで小さな花が添えられていた。十二の子どものやることだった。

ペンを置き、窓を一寸ほど押した。朝の市場の気流が、書物の匂いを押し流して入ってくる。

（――うまくいった。あの子はもう引き返さなくていい）

そう思った口の端が持ち上がりかけたとき、扉を叩く音がした。

二度、重く、間を置かずに。

朝の訪問者に心当たりはない。

カイネは羊皮紙の束を棚に戻し、かんぬきに手をかけた。

白い手袋が敷居の外にあった。

騎士団の礼装のうえに師団長の白マントをはおった男が、朝日を背にして立っていた。

「――ヨルドか」

「あける、とは言っていない」

肩で扉を押し込み、男はずかずかと土間に踏み込んだ。

「研究の邪魔は、よしてもらおうか。用があるなら、届けを出すべきだろう」

「ある」

ヨルドは卓のうえに鞣革の薄箱を置いた。赤い封蝋に騎士団本部の印がある。

「第七研究室、魔術事故調書。原本だ。副本は今のところ、俺の手元にしかない」

カイネは一步、箱に近づいた。指先を伸ばしかけ、止めた。

「――開けるとは言わない。中身は、お前が一番よく知っているだろう」

「私は無実だ」

「知っている」

ヨルドの口角が、刃を引くような形に動いた。

「知ったうえで、握っている」

カイネは背を立て直し、相手の三白眼を見据えた。

「騎士団長殿は、私に何を要求するつもりだ」

「言葉遣いは昔のままだな」

「お前より四つ年上である事実は、その制服では変わらない」

「かもしれない」

ヨルドの指先が、薄箱の縁を二度叩いた。

「お前の妹。師範学校の寮にいるな」

カイネの指が卓の縁を握った。

（名を出すな。――これは初手だ。読まれるな）

「――止めろ」

「調書が曲解されて表に出れば、妹の進学は取り消し。家の名誉は、同時に沈む」

「偽造はお前にとっても罪のはずだ」

「偽造はしない。事務方に文書の読み方を変えさせるだけだ」

ヨルドは卓に手をつき、顔を寄せてきた。白い手袋の甲に血管の影があった。

カイネは卓のうえに広げたままの妹の便箋を、手のひらで覆うように押さえた。ヨルドの視線は、その動きを一度見て、何も言わずに戻った。

「選べ、カイネ。焼くか、残すか」

「条件は」

「今日から毎晩、ここに来る。俺を入れろ」

「――それだけか」

「最初はな」

窓の外で、朝の荷車が石畳を走っていった。

カイネは息を整えた。息の乱れをこの男には渡さない。

（断れば妹が沈む。受ければ私が沈む。――どちらで沈むかの選択だ）

選択ではなかった。沈む側の方角を決めるだけの、通告だった。

ヨルドが腰に提げた短剣の柄に朝日が当たり、鞘の金属に白い反射が走った。それから何秒か、部屋のなかで動くものは何もなかった。妹の字だけが卓のうえに広げてあった。

「……わかった」

カイネは卓から手を離し、相手の目を正面から受け止めた。

「ただし、ヨルド。ひとつだけ、先に言っておく」

「なんだ」

「身体は、お前の好きにしてい。私は抵抗を演じない」

「――ほう」

「だが心は、渡さない。それは先に承知しておけ」

ヨルドは一拍答えなかった。

白い手袋の親指が、右手の手袋の縫い目をなぞって止まった。

「それは、これから」

男の声が低くなった。

「俺が見せてもらう」

ヨルドは白マントを外し、椅子の背に投げた。鞆革の薄箱は卓のうえに置いたままだった。

「脱げ」

「自分で脱ぐ。触るな」

カイネは卓から下がり、学者服の帯紐に指をかけた。

指先は震えていない。震えていない、ということを指先に言い聞かせながら、一本ずつ結び目を解いた。袖口のインクのしみが目に入った。

（――ただの観測だ。これは、ただの観測行為だ）

帯紐が床に落ちた。上衣を肩から落とす。肌着を頭から抜く。下衣を腰から下ろした。

床板の冷気が、足の裏からくるぶしまで上がってきた。

ヨルドの指が、カイネの腰の骨を掴んだ。

「その強情は、あと何分もつか測ってやる」

「測ればいい。結果は毎日同じだ」

ヨルドが笑った。息だけで。

「床に手をつけ」

言われる前に、自分から床に手をついた。四つん這いの姿勢。

（この姿勢は屈辱ではない。命じられた姿勢を、自分から取っただけだ）

書物の匂いは床板の近くでは薄かった。ほこりと油の匂いがする。

ヨルドが背中側に回った。白い手袋が、カイネの性器を下から包んだ。布のうえから、親指の腹で根元を押さえ、先端までゆっくりしごいた。

反応するな、とカイネは自分に命じた。

命じたが、身体は別の命令系統で動いた。

革の内側の、体温と違う熱がじんわりと肌に移った。革の継ぎ目が、亀頭の鈴口を点で擦る。

「――反応、早いな」

「体質だ」

「体質、ね」

ヨルドは手袋を外した。白い革が二枚、床に落ちる音がした。素手で握り直してきた。手の熱が直に肌の下まで伝わった。

ぐちゅ、と根元で音が立った。先端が濡れている。

「床を、これで擦れ」

「なに」

「雑巾がけだ、カイネ」

ヨルドがカイネの腰を押し下げた。性器の先端が、冷えた床板に触れた。

ちゅ、と透明な液が板の木目にしみた。

カイネは奥歯を噛んだ。噛んだまま腰を前に出した。

ずっ、と板の木目が亀頭の裏筋を擦った。

「――は、ッ」

声が出た。歯の隙間から、意図せず。

（声を出すな。――出た分、記録だけ取れ。処分は後だ）

前に、後ろに、腰を動かした。床板は冷たく、性器は熱い。温度差でじん、と痺れが走る。

先走りが床に糸を引いた。板の木目に、白い筋が左右に伸びた。

「もっと速く」

ヨルドが背後から腰骨を押した。

カイネは速度を上げた。自分で自分を追い詰める形に、板を使った。

がく、と前腕が震えた。二の腕の内側が攣りかけ、肘まで熱が上がってきた。

床板の節目が、亀頭の溝にちょうどはまる位置で擦れ、背中から頭の芯まで、びりっ、と電が走った。

「起きろ」

ヨルドの手が首の後ろを掴んで、カイネを仰向けに転がした。床板のうえに背中が落ちた。ほこりが胸の皮膚に張りついた。

「――っ」

脇腹で呼吸が痙攣した。腹は上下に大きく動き、胸骨のあたりで、心臓が打っている位置が、外から見えそうなほどに振れた。

ヨルドはカイネの両足のあいだに身体を入れた。騎士服のズボンのうえから、太ももの内側がカイネの太もものに触れた。布の糊の匂いがした。

ヨルドが顔を下ろした。

「――待っ――」

湿った熱が亀頭を包んだ。

ぴちゃ、と舌が鈴口の縁を舐めた。

カイネの背筋が床から浮いた。首の後ろだけが床についたままで、肩甲骨が浮き上がった。両方の肩甲骨のあいだに、ほこりが寄って、粘った汗と一緒に粉のように張りついた。

ヨルドの舌は事務的だった。動きに迷いがない。裏筋を根元から先端まで、ひと舐めで舐め上げ、鈴口で止め、また根元に戻る。

ちゅぽ、と口全体が亀頭を含んだ。

熱、水気、柔らかさ、そして下の歯の硬い縁。四つが一緒に、肌の薄いところを攻めてきた。下の歯の縁は、触れる位置と触れない位置があった。触れない位置の方が怖かった。

（――出るな。まだ出るな）

カイネは両手で床板の木目を爪で掻いた。爪の先が板に引っかかった。

ヨルドは吸い上げた。

じゅっ、じゅっ、と唇の端から、空気と唾液の混じった音が鳴った。

頬の内側が亀頭を両側から挟み、先端だけを舌がちらちらと舐めた。

腰の奥で熱が集まった。

「――っ、ッ……！」

声が喉の奥で潰れた。腹の奥で睾丸が持ち上がった。

達く。

達く、と身体が勝手に前に出た。

――ちゅぽ、とヨルドが口を離した。

寸前で、空気だけが性器の先端を撫でた。

出かかった波が行き場を失って、腰の内側で暴れた。

カイネの腰が宙でがくんと跳ねた。

下腹の奥、睾丸の裏側のぬるい一点に熱が滞留した。出口を閉ざされた熱は血管のなかでいくつにも割れ、ひざの内側、足の指先、さらにはうなじまで逆流した。

「――、……ッ」

「――まだ早い」

ヨルドが唇を舌で舐めた。口の端に透明な糸が光っていた。

カイネは腕で目を覆った。腕の内側の汗が、目尻にこめかみに流れた。

（……一度目）

意識の一部を冷たい方に戻す。呼吸が数十度分の遅れで追いついてきた。

二度目はもっと早かった。

ヨルドが今度は片手で根元を縛るように握り、口で先端だけを、飴を舐めるように吸った。舌が、鈴口の縁を内側から外側へ、外側から内側へ、休みなく擦った。

カイネは、木目を掻いた爪の下に、木の繊維が刺さったのを感じた。その痛みで意識を引き戻そうとしたが、腰の奥の熱はそれ以上の速度で集まった。

「――、う、く、ツ」

ちゅぽ、とヨルドがまた口を離した。

今度は寸前ではなかった。明らかに達していた波の途中で外された。

熱が先端まで来て出口を探した。

出口がない。

カイネの性器の先端が、びく、びく、と震えながら、白いものを透明な先走りと一緒に、泡のようににじませた。達けない射精のかたちで痙攣した。赤黒く腫れた亀頭の鈴口の縁から、ほんの一滴、半分だけの白濁が垂れ、幹の裏を伝って根元まで糸を引いた。

「――汚いな」

ヨルドが親指の腹でそのにじみを拭った。拭ったその指先を、カイネの唇のすぐ下まで近づけた。近づけて止めた。口に入れさせる気はないらしい。ただ、見せるためだけの仕草だった。

(……二度目)

カイネの呼吸はもう整わなかった。胸が大きく速く上下した。

三度目に、ヨルドは口ではなく、手のひらの付け根の固いところを使った。手首のしなりで、亀頭の裏を連続して擦り上げた。擦りながら、口で鈴口だけを吸った。

カイネの踵が床板を蹴った。爪の先が板の木目をまた掻いた。

「――、ツ、――」

今度こそ、とカイネの身体は信じた。

ヨルドは一瞬、全部の動きを止めた。

手も口も舌も。

カイネの性器は、何にも触れられないまま空中に取り残された。

腰が空を引っ掻いた。

「――ッ、は、……ア、――」

喉の奥で、息だけが鳴った。

(……三度目)

天井がぼやけた。ぼやけたが涙ではなかった。汗が目尻に、こめかみから流れ込んだだけだった。

ヨルドは身体を起こし、カイネの脇に座り直した。素手が濡れたまま、カイネの性器をもう一度握った。

「達きたいか」

「……」

「達きたいなら、頼め」

カイネは腕で覆った目の下から、天井の板目を見た。

天井の板目を、一つ、二つ、三つまで数えた。

「――断る」

絞り出した声だった。

「頼まない。私はお前に頼まない」

ヨルドが何も言わなかった。

沈黙の長さが、部屋の空気の密度を変えた。

それから素手が動き出した。

指は長く、節は硬く、手のひらの、親指の付け根の肉がカイネの裏筋のうえをきっちりと走った

。

握り込みながら、絞り上げるように、根元から先端まで一気に走らせる。

握りの強さは不快の一步手前で止まっていた。

（――この男は、三度の寸止めで、どこをどう触れば私が弾けるかを測り終えたいらしい）

（痛みは与えてこない。痛みは逃げ道だ。与えられているのは、逃げ場のない純粋な快の圧だけだ）

「――、や、……ッ――」

一度引いていた波がもう一度、集まり直してきた。今度は遠い場所からゆっくりと。

手の速度が上がった。じゅぶ、じゅぶ、と先走り手の肌が鳴った。親指の腹が、裏筋の一点を連続して押し潰した。親指のすぐ下、人差し指と中指の付け根の節が、亀頭の溝を輪のように、締めてほどこいてを繰り返した。

カイネの前腕が、目の上から外れて床に落ちた。

「達け」

「……っ」

「達け、カイネ」

波が近づいた。今度は止まらなかった。

カイネは天井の板目を数え直した。

一つ、二つ、三つまで数えたところで、視界が白くなった。

どぶ、と熱がヨルドの手に噴いた。

二度、三度脈打った。最後の一度は自分の腹まで飛んだ。熱いものが、臍の一寸ほど上で跳ねて、冷めていく感覚が、遠くから届いた。

カイネはヨルドの名を呼ばなかった。

呼ばなかった、ということが、自分の最後の記録だった。

ヨルドが手を離れた。白い体液が、手の甲から手首まで糸を引いて垂れた。

カイネは床に頬をつけた。板は冷えていた。冷たさが頬から首の裏まで下りていった。首の裏の汗が引くにつれて、下腹の底に、達したあとの鈍い余熱が残った。余熱は、熱というより鉛のような重さだった。

ヨルドはしばらく動かなかった。

カイネは目だけを動かして相手を見上げた。

ヨルドの口元は笑っていなかった。笑っていないというより、笑い方を一瞬忘れたような顔だった。

右手の、汚れていない方の手袋を床から拾い上げ、縫い目を親指の腹がなぞり、止まった。

（――この男は苛立っている）

カイネは床に頬をつけたまま、目を伏せた。

（屈服を得られなかった。――勝ちだ）

心のなかでそう言ったが、唇は動かさなかった。

声に出したら勝ちが消える気がしたからだ。

ヨルドは卓のうえの鞣革の薄箱を左手で取った。汚れた右手は使わなかった。白マントは椅子の背から回収し、片方の手袋は床に残したままだった。

「――明日も来る」

声が冷えていた。

「同じ時刻だ」

「好きにするといい」

カイネは体を起こさずに、そう返した。

「私は、私のままだ」

扉が閉まる音がした。かんぬきの落ちる音はしなかった。

ヨルドが明日も入れるように残したのだ。

カイネは床に手をついたまましばらく、そのままでいた。腹のうえの白い筋が乾いていくにつれ、皮膚がつっぱった。

妹の手紙のことを考えた。来月の実習が決まった、と書いてあった。

そのことだけを考えた。

床板の油の匂いが薄く、研究室の匂いに似ていた。

2

第二話 魔導筒と初めての夜

学院研究棟の朝は、石段に降りた霜の匂いから始まる。

カイネは普段どおりの時刻に席に着き、羊皮紙の束を机に広げた。右の袖口を左手で払う。昨夜のうちに落としておいた床板の木目のすじが、袖の裏地に一本残っていた。

（――見えるものではない。気のせいだ）

ペンを取り、インクに先を浸した。机上の帳面に、今日の検算の頭だけを書いた。数字と数字の間隔は、いつもと同じ幅に並んだ。

隣席のウィタが革袋を抱えて戻ってきた。同じ研究科の三年上、痩身、前髪の下で目尻だけがよく動く男だった。

「カイネ。昨日、あなたの顔を騎士団本部の書類で見た」

羊皮紙の端が、ペン先の下で一瞬浮いた。浮いたが戻した。

「――本部の、何の書類で」

「閲覧請求の一覧だ。第七研究室の事故調書。請求者は、師団長のヨルドだ」

ペンの先が、帳面の上で止まった。

「閲覧だけか、持ち出しか」

「そこまでは見えなかった。だが、師団長が事故調書を『請求』するのは普通ではない。普通は、事務方の判事補が担当する」

カイネはペンを机の縁に置いた。

（――請求の形を取った。事務方にまだ、書類の行き先を握らせていないということだ）

（副本が、まだ彼の手元で止まっている）

（間に合う。今なら、まだ間に合う）

ペン先で、机の木をトットと三度叩いた。叩いて止めた。

「教えてもらった借りは、後日返す」

「いや。私は何も見ていない。それだけだ」

ウィタは革袋を机の下に押し込み、自分の仕事に戻った。前髪の下の目尻は、もう動かなかった。

カイネは帳面の検算の続きを書いた。数字はいつもと同じ間隔に並んだ。

並んだが、胸の内側では別の計算が走り始めていた。

（対抗資料。同じ事故の、別の観測記録。第七研究室の誰かが、必ず控えている）

（それを彼が掴むより先に、第三者機関へ出す）

（――沈む側の方角を、もう一度こちらから決め直す）

昼の鐘が鳴るまで、カイネは机から動かなかった。昼の後、研究棟の裏手で第七研究室の元助手を探す必要があった。今日は無理でも、明日には会える。

夕刻。

北区の石畳は、研究者たちの帰路の影が長くなるころにはすでに冷えていた。カイネは路地を一つ、いつもと違う順で曲がった。曲がり角ごとに足音を数えた。尾行はいなかった。少なくとも下手な尾行はいなかった。

借家の扉には、かんぬきを下ろしていない。ヨルドが残していったのだ。

ためらわず、扉を開けた。

ヨルドは部屋の中央の卓に浅く腰をかけて、カイネを待っていた。白マントは朝と同じ椅子の背にかけられ、右手にだけ手袋が残っていた。汚れていない方の手袋だった。

「遅かったな」

「研究者の定時は、騎士の定時とは違う」

「――今日は、特別な道具を持ってきた」

ヨルドの左手が、卓のうえの細い円筒を立てた。

金属の輪が、卓の上でかたん、と鳴った。

長さはちょうど手のひら四つ分。太さは、握ったときに親指と中指が辛うじて触れ合う程度。内側には青白く発光する魔石が、一定の間隔ではめ込まれていた。魔石の光は、筒の内壁を鈍く温めていた。

（魔導筒か。――巻物を丸めて持ち運ぶ、使い古しの道具だ）

（ただし、これは巻物が入っていない）

「抜きたかったら、俺を興奮させろ」

ヨルドが短剣の柄に、右手の親指を置いた。置いて動かさなかった。カイネはその指の止まり方を一拍だけ見た。

「奉仕はしない」

「奉仕しろとは言っていない」

「――では、何をしろと」

「処理しろ。お前が日常でこなしている通りにだ」

寝所の敷物の中央に、カイネはひざを崩して座らされた。下衣を腰から引き抜かれ、脚の間に魔導筒を差し込まれた。

金属の輪が根元に冷たく食い込んだ。魔石の光が、幹の裏側を内側から鈍く温めた。冷と温が同じ場所で反対方向から皮膚を挟んだ。

（――温度差だけで反応するな）

カイネは奥歯を噛んだ。噛んだが、熱は集まった。筒の内側はざらついた布張りで、勃起していく幹を内壁が容赦なく擦った。筒は動かない。動くのはカイネの幹だった。

幹が筒の内径まで膨らみ切ったとき、布張りの縦の織目が、先端の裏の鈴口のすぐ下に一点で食い込んだ。その一点が、じ、じ、と微細な電を下腹の底まで流した。逃げられなかった。動けば擦れる。止まっても魔石の熱が、皮膚を内側から押し続けた。

「達ったら、筒の先からお前の体液が溢れる。床に垂れるのが見える」

「――黙れ」

「筒を外したかったら、俺を先に達かせろ」

ヨルドは寝所の縁に座り、下衣の前を開けた。

既に勃起上がった幹が、下着の縁から持ち上がっていた。太く、色が濃く、裏筋に血管が一本太く走っていた。先端は赤黒く濡れていた。

カイネは魔導筒を腰にぶら下げたまま、四つん這いになった。金属の輪が、体の向きを変えるたびに裏筋を点で擦った。その一点一点が、筒の中で電気のように走った。

顔をヨルドの前に下ろした。

（――処理だ。顕微鏡の試料を扱うのと同じだ）

息を整えた。唾液を舌の下にためてから、先端を口に含んだ。

ヨルドの先端は、カイネの口のなかで熱かった。舌に、塩気と男の匂いの苦い方だけが広がった。

「ほう」

カイネは舌先で鈴口の縁をなぞった。左手で根元を握った。右手は魔導筒の縁に添えた。筒が動かないように押さえるためだった。動けば内壁が自分を追い込むからだだった。

口のなかで、先端を頬の内側に逃がした。頬の内壁の、粘膜の柔らかいところで亀頭を横から挟んだ。舌で、裏筋の根元に近いところを下から上へ舐め上げた。

ちゅ、と唇の端から音が出た。

（――音は出ていない。耳のせいだ）

カイネは目を閉じなかった。目を閉じれば屈服に見えると知っていたからだ。三白眼の、相手の目を正面から受け止めたまま、口だけを動かした。

舌は検算と同じ速度で動かした。同じ角度、同じ強さ、同じ間隔。感情の温度が舌先に混入しないように、意識の半分を帳面の数字の方に預けた。予感した反応の六割ほどしか、口は出さなかった。残りの四割は観測の余白として保存した。

「――気持ちの、こもらない、フェラは、初めてだ」

ヨルドが笑った。喉の奥でだけ息が鳴る笑い方だった。

笑ったが、右手の親指が短剣の柄の位置を一度握り直した。握りの強さが一段増したのを、カイネは目の端で観測した。

（――効いている）

（処理、というこの形が効いている）

カイネは返事をせず、速度を上げた。舌の動きは単調だった。同じ角度、同じ強さ、同じ間隔で裏筋を擦り上げた。

ヨルドの指が、カイネの後頭部に置かれた。

「もっと深く」

指の腹に、下向きの力が加わった。カイネは押されるよりも先に、自分から頭を下げた。押されてからでは屈服に見えると判断したからだった。

先端が、喉の手前まで入った。喉の粘膜の入り口の、柔らかい肉が亀頭を押し返した。押し返しながら包んだ。

「――う、っ」

声が、喉の奥で潰れた。カイネの声ではなかった。ヨルドの声だった。

魔導筒の内側で、カイネの幹が喉の緊張と連動して震えた。筒の内壁が、震えに合わせて擦れた。

ヨルドが後頭部の指に力を入れた。今度は押した。

ぐぽ、と先端が喉の入り口を越えた。

カイネは息を鼻から吐いた。吐きながら、舌を亀頭の裏に押し当てた。

ヨルドの腰が、敷物のうえで一度跳ねた。

ちゅぷ、ちゅぷ、と唾液と先走りが混ざる音が立った。

「――出る、ぞ」

カイネは顔を引かなかった。

ヨルドが先に達した。

喉の奥に熱が噴いた。粘性の高い、塩気の強いものが舌の根元を通して、喉の内壁にぶつかった。二度、三度脈打った。

カイネは吐き出さなかった。吐き出せば処理ではなくなるからだった。

ヨルドの幹から口を離れた。口角から、白いものが糸を引いて垂れた。

自分の口の内側にあるものを、一拍置いて飲み下した。

ヨルドの笑いが消えていた。

右手の親指が、短剣の柄の同じ位置で動かないまま止まっていた。

ヨルドは答えず、立ち上がった。

カイネの腰を後ろから、敷物の端まで引きずった。魔導筒が内側で幹に擦れた。擦れた分だけ熱が溜まった。

「――抜けよ」

「抜かない」

ヨルドはカイネをうつ伏せに押した。腰だけを持ち上げた。魔導筒は腹の下で、敷物にこつ、と当たった。

ヨルドの指が、後ろの狭い窪みに触れた。

冷たい液の音がした。小瓶の蓋が開けられる音だった。

（――備えて来たのか）

ぬるい、油のような液が指の腹に載って、入り口をゆっくり押し広げた。小瓶の蓋がもう一度、かち、と閉じる音が後ろでした。

カイネは敷物の縫い目を、爪で搔いた。爪の下に糸の繊維が刺さった。

指が一本入った。次に二本目が追加された。

二本目の指が、腹側の上の方を探った。

「――は、ッ」

声が、腹の底から押し上げられて、歯の間から漏れた。

ヨルドの指が一点を押した。押した位置は動かなかった。動かないまま、圧をゆっくり上げた。

魔導筒の内側で、カイネの幹が弾けるように反応した。内壁を勢いよく擦り上げた。

（――達く）

（――道具の中で達く）

ぷちゅ、と筒の先端から、白濁と先走りの混じったものが噴き出した。筒の内壁を伝い、先端の穴から糸を引いて敷物に垂れた。

達したが、射精の気持ちのいい抜け方ではなかった。筒のなかで、逃げ場のない擦過と圧縮の末端としての射精だった。達したのに、腰の奥の熱は抜けきらず、もう一段深い場所に残った。

カイネは声を出さなかった。

ヨルドの名も呼ばなかった。

ヨルドが指を三本に増やした。三本が同じ一点を連続して押した。

「――ッ、――」

カイネの腰が、敷物のうえで宙を引っ掻いた。

指が抜かれた。

代わりに、先端が当てられた。

ずぶ、と押し入ってきた。

初めての圧だった。入り口の輪が一度大きく広げられ、奥の粘膜が押し分けられた。異物の熱と体温が、同じ温度になるまでの数秒間が異様に長かった。圧は、痛みに変わるその一歩手前で止まった。痛みに変われれば逃げ場ができる。その逃げ場が、最初から与えられない深さだった。

「――っ、く、――」

ヨルドは根元まで入れた。入れたまま止まった。

止まっても、ヨルドの幹は内側で脈を打っていた。脈が一度打つごとに、腹側の、さっき指で探された一点が、幹の裏側の膨らみで押された。

押されるたびに、魔導筒の内側でカイネの幹が連動して跳ねた。前と後ろの二箇所の圧が、同じ一つの体の中で別々のタイミングで暴れた。

「達け」

「――断る」

「頼まなくていい。達け、というのは命令だ」

ヨルドが腰を引いた。引いて、また入れた。

ずぶ、ずぶ、と油と体液の混じる音が鳴った。腹側の一点が突き上げられるたびに、魔導筒の内側でカイネの幹が弾けるように反応した。二度目の射精が、筒の先端からにじんだ。

カイネは敷物に頬を押しつけた。

ヨルドが腰を抱えた。速度を上げた。

ぐち、ぐち、と音の間隔が短くなった。腹側の一点への衝突の角度が、少しずつずれていった。ずれるたびに、カイネの腰が勝手に揺れた。

「――、ッ、――、――」

喉の奥で、声になる手前の息が鳴った。

一突きごとに、魔導筒の金属の輪が、敷物の上でかた、かた、と小さく跳ねた。跳ねるたびに、輪が根元を一度強く食い、次の一突きでまた離れた。食い、離し、食い、離しが、ヨルドの腰の律動と同じ拍で続いた。

（呼ばない。――この男の名を呼ばない）

（呼ばない、ということが、私の唯一の残高だ）

三度目の波が近づいた。ヨルドの指が、腰骨の左右を同時に強く掴み直した。

ヨルドの幹が、一番奥で大きく脈打った。

どく、と内側で熱が噴いた。ヨルドが先に達したのか、カイネが先に達したのか、順序はわからなかった。

魔導筒の先端から、もう出るものがなくなった、薄い、透明な余りの液だけが、一筋敷物に垂れた。

ヨルドが腰を引いた。

カイネは敷物に、そのままの姿勢で留まった。腹側の一点が、まだ熱を持っていた。

ヨルドの息が、背中の上で乱れていた。乱れている、ということが、カイネには勝ち目に見えた。

魔導筒をヨルドが外した。根元から引き抜かれた。筒の内壁と、幹の裏の擦れが、最後に一度だけずり、と鳴った。

「――なぜ、俺の名を呼ばない」

ヨルドの声は、低く冷たかった。

カイネは敷物に頬をつけたまま、目だけを開けた。

「呼ぶ理由がないからだ」

ヨルドが息を止めた。

止めた息が、もう一度動き出すまでの間、短剣の柄のうえで、右手の親指が位置を変えた。

「お前が俺の名を呼ぶまで、これは続く」

「……」

「聞いているか、カイネ」

「聞いている」

カイネはそう答えた。答えたが、それ以上は口に出さなかった。

（――では、永遠に続くな）

（永遠に続くなら、永遠に勝ちだ）

口に出さなかった言葉を、敷物の縫い目の、糸の間に押し込んだ。

ヨルドが立ち上がり、身支度を整えた。扉が閉まる音がした。かんぬきは今夜も落ちなかった。

カイネは敷物のうえで、しばらく動かなかった。

腹側の一点が、ゆっくりと熱を手放していった。熱が抜けた後に残ったのは、重さでも痛みでもなく、体の中のどこか一か所が他人の形に押し広げられたままで、元に戻っていない、という感触だけだった。その感触を元に戻すすべは、今夜はもうない。

朝のウィタの言葉を思い出した。

（――閲覧請求。持ち出し、ではない）

（明日、助手に会う）

（沈む側の方角を決め直す――それだけが、今夜の残りの仕事だ）

魔導筒は、敷物の横に転がっていた。金属の輪が、部屋の薄暗がりのなかで鈍く光っていた。